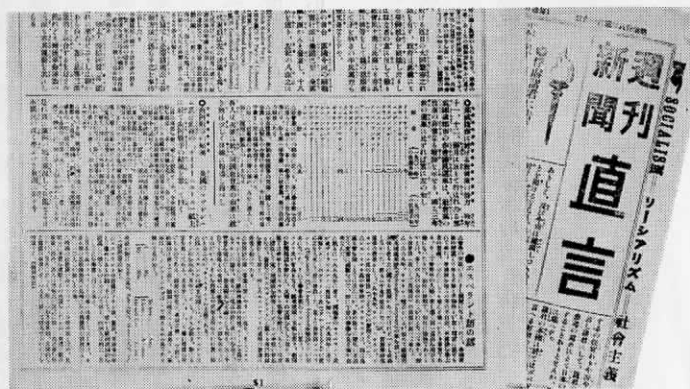


第一章 世界を結ぶ一つの言葉



週刊『直言』（界利彦の「エスペラント語の話」を掲載）

エスベラントは、われわれが必要によって使うやさしい言葉であるというだけではなく、重大な社会問題である、ということを忘れてはいけない。

ザメンホフ

人類の未来を信じて

能力に応じて働き、必要に応じて消費するという理想の社会が実現していた。市役所へ行くと、あまり風采^{ふうさい}のあがらないオッさんが気楽に應對している。話している内容は、水道をどうするとか、公園の施設をこうした、というたぐいのことばかり。警察はどこにあるのだろうか？ あるのかもしれないが、こんな所にごやっかいになるような事件はたえてない。このオッさん、つまり今の市長にあたる人の給料は、ふつうの肉体労働者と全然同じである。いや、給料という制度もなくなっているだろう。独占資本、帝国主義、軍隊……こんなコトバは今では歴史の教科書や時代劇に出てくるぐらいで、まず普通には聞けなくなっている。エンゲルスが言ったように、国家というものが、青銅のオノとともに博物館へ行ってしまったのである。

いつのときかこんな社会がこの地上に出現する、いや、出現させねばならない、とマルクスやエンゲルスは考えた。バクーニンやクロボトキンも少し違った形で同じようなことを考えた。かれらに先行し、後続した思想界の先駆者も数多い。国家の死滅こそが人類発展途上のきわめて重要な一段階であるからだ。

しかし、と、ここで他の者は考える。無階級・無国家の社会が出現しても、「民族」という問題がまだ残るのではなからうか。それは多分に生物学的なものであるから、社会制度が変わり、民族間の

血の交流がさかんになっても、たやすく解決される問題ではなさそうだ。それから、こうした社会での言葉はどうなるのだろうか。国家がなくなり、全人類が団結するときの言葉をどうするのだろうか。やっぱり通訳とか翻訳とかいうようなものが必要なのだろうか。今と同じように、英語・フランス語・ロシア語・スペイン語、あるいは中国語というような大国の国語がのびたり、他の弱小民族は黙ってそれをおしつけられるほかはないのだろうか。そうであつては断じてならない。いつの日か、無階級・無国家の社会に単一の世界語が成立するにちがいないが、それまではさしあたって国際語が必要ではないか。同一民族間ではその国語を、他民族との間では国際語で、というのが当面の解決策であろう。当面、この役にたつものは、ポーランド生まれの目医者、ラザール・ルドビコ・ザメンホフ（一八五九—一九一七）が考案したエスペラントであろう。これはヨーロッパ諸国語を、いけば体系的に処理したものである。アジア人やアフリカ人にとっては必ずしも完全なものとは言いきれない性格を持っているが、今のところ、これにまさるものはない。その不完全な部分は使用の過程で修正されていくだろうし、それが歴史の必然というものだ。まずこのエスペラントを今の資本主義社会のワタの中からでも守り育てていくのではないか。全世界に社会主義が実現してから、あわててこの問題に取り組んでみても間にあわない。社会主義文化が資本主義の胎内で育っていくのと同じ道理であらう。

こう考えた一群の人びとがあつた。堺利彦や大杉栄がそれである。それは第一次世界大戦の前から労働者エスペラント運動という形ではじまり、一九二一年にS.A.T. セントラル・アソシエーション (Sennacieca Asocio Tutmonda トットモンダ・アソシエーション) を創立することによって、一応その結集を完了した。も

ちろん、これにも問題が起こった。コミンテルン（国際共産党）の、あるいはコミンテルンの名によるエスペランティストへの干渉によるサートの分裂もあり、さらにソヴェート同盟やドイツではスターリンやヒトラーによる左右からの弾圧を受けて苦悩するのであるが、それは少し後のことである。

といっても、エスペラントは国際語、あるいは国際語でありたいと努めている言葉であるから、それが言葉である以上、あらゆる使用者、この場合ではエスペランティストが、みんな以上のようなことを考えているわけではない。第一、考案者のザメンホフ自身は社会主義などからは相当遠いところにあった。エスペランティストの中には資本家もいれば労働者もいる。宗教家も無神論者もいる。政治家、軍人、科学者、商人、農民……それが言葉の名に価値をさげ、あらゆる見地からのエスペラントの使用があるのは当然である。佐藤栄作や田中角栄に日本語の使用を禁止することが残念ながらできないのと同じことと言える。すでに二回の大戦には、部分的にはあるが、ドイツ・イタリア・日本などでエスペランティストが「聖戦の意義」を訴えた歴史がある。同じように、一三三日で倒れたベラ・クンを主席とするハンガリー・ソヴェート共和国が政府布告にエスペラントを使用したことがある。現在でも中国やハンガリーの政府は対外宣伝雑誌のエスペラント版を出しているし、社会主義諸国をふくむヨーロッパ諸国ではラジオ放送による対外宣伝に大いに使われている。北京放送は、週一回エスペラントで帝国主義と修正主義に対する闘争を呼びかけているのである。

およそ言葉とはこうしたもので、エスペラントだけが例外であると考えるのはおかしい。エスペラントと民族語の差は、それが一民族、一国民のものでない、という点だけなのである。

黎明期の学習者・運動者たち



丘 浅 次 郎

日本人で最初にエスペラントを学習した人は、この国に進化論を普及させた丘浅次郎である。一八九一年、ドイツ留学中のことであった。最近、丘博士の著作集も刊行され、特異な思想家として再認識されているが、この人の国際語思想についての研究や、政治的思想の究明があまりやられていないらしいのは残念なことである。『猿の群れから共和国まで』⁽¹⁾という丘の著書には、共和国が最高の政治形態である、というようなことは言っていない。おそらく書くことができない。かつただけのことで、題名そのものがピタリとこの進化論者の思想を語っているではないか。われわれエスペランチストは、この人を先学として仰ぐことに無限の誇りを持ってよいと考える。

そして日本で最初にエスペラントの独習書を書いたのは、実に日本近代文学の父である二葉亭四迷（長谷川辰之助）であった。この人についての研究は相当細部まで行なわれているから、ここにはいっさい略しておくが、一言で言えば、自由民権運動の末流に属して、文学活動ではその進歩的方面を、

新聞記者活動をふくむ政治的理念としてはその退廃的方面をあらわした人であった。エスペラントの独習書や教科書を書いたのも、どうやら政治活動の便宜のひとつとしてのことだったらしいが、二葉亭の独習書は、この国のエスペラント運動の大きな礎石のひとつになった。

しかし、この国の多くの分野でそうであったように、最初にエスペラント運動らしいものをしたのは、やはり外国人であった。一九〇二年に長崎の海星中学でアルフォンズ・ミスレルというフランス人が自分の中学で生徒六〇人にエスペラントを教えた記録が残っている。岡山の第六高等学校の教師であったエドワード・ガントレットは一九〇六年に通信教育をはじめ、合計六〇〇人に教えたと言う。この中にはガントレットの義弟山田耕筈（音楽家）、田川大吉郎（自由主義的政治家）らのほかに、

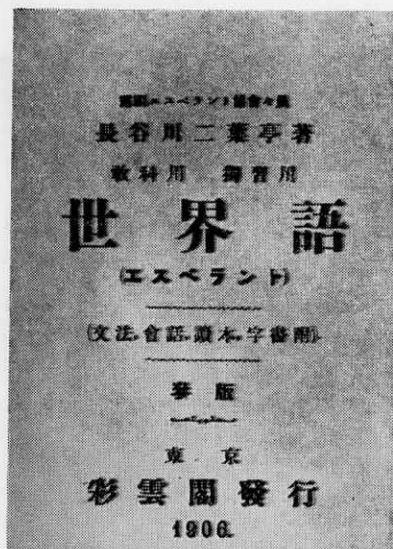
後述の堺利彦・大杉栄らの社会主義者もふくまれている。

以下、日本エスペラント運動の初期の歴史を年表ふうにまとめてみると――

一八九一 丘浅次郎、フライブルグで学習。

一八九三 アイルランド人ギャハガン（ザメ

ンホフの著書の英訳者）、外務省嘱託として来日。ただしエスペラント運動についての実績は不明。





日本最初のエスペラントの雑誌 LA JAPAN ESPERANTISTO (1906年8月発行)

一九〇二 ミスレル、海星中学で講習。陸軍軍医下瀬謙太郎が学習。

一九〇三 (平民社創立) 黒板勝美、ガントレット、言語学者神保格、アナキスト福田国太郎、鉄道技師武藤於菟らが学習。吉野作造が『新人』に紹介記事を書く。

一九〇五 (日露戦争終結) 後の大阪外語校長中目覚が学習。堺利彦が『直言』に

記事を書く。ガントレット、通信教授を開始。

一九〇六 加藤節ら横須賀に日本エスペラント協会を設立。黒板ら横須賀の組織をも吸収して日本エスペラント協会を創立。名誉会員は、伯爵林董(のちに会頭)、男爵菊池大麓。第一期の評議員は、藤岡勝二(東大教授、言語学)・斯波貞吉(『万朝報』記者・国家社会党創立者)・飯田雄太郎(社会主義運動の同情者であった画家)・浅田栄次(言語学者)・足立荒人(『読売新聞』主筆)・丸山通一(一高教授)・安孫子

貞次郎(英語雑誌編集者)・磯辺弥一郎(国民英学会)・山県五十雄(社会主義的な英学者)・高橋順次郎(仏教哲学者)・堺利彦・田川大吉郎・薄井秀一(『読売新聞』記者)。のちにさらに大杉栄らが補充される。二葉亭が『世界語』を発行。発行人はアララギの歌人、岡麓。

エスペランチストの思想的分類

ここでエスペランチスト層の思想的分類をやっておきたい。これは日本人を対象に考えたものであるが、ヨーロッパ諸国、とくに弱小民族にあつては、このまま通用するはずである。

その第一は、自然科学者たちである。国際的学究生活の中で矛盾を感じる最大のひとつが言葉の問題であるからだ。せっかくの論文も、読み手の少ない日本語で書かれていては、国際的に容易に認められない。この悩みは今日でもしばしば報じられているとおりでである。外国文献の摂取についても同様の不便がある。この人たちが国際語問題に敏感であるのは今も昔も同じである。

第二に、自由主義者、人道主義者、広い意味での社会主義者。とくに社会主義者は、「全世界のプロレタリア団結せよ」と言ってみても、大国主義の世の中で、不便と不平等を痛感している。便宜上宗教者をここへ入れておくのも許されるであろう。大杉栄・堺利彦・由比忠之進など、本書に登場する大部分の人がこれにはいる。

第三の要素は、第二とは正反対のナショナリストたちである。とくにウルトラ・ナショナリストに

とっては、英語その他による「言語帝国主義」の圧迫に甘んじることがとうていできないことである。本書では北一輝がこの層を代表するが、初期の運動に数多く参加した職業軍人の圧倒的大部分がこのカテゴリーに属する。

第四の層は、語学的興味で学んでみるという人たち。この人たちは遅かれ早かれ他の層の中に解消してしまいか、エスペラントそのものからしだいに遠ざかっていく。

そして第五は、切手収集家を代表とする実益者の群れである。この層は、ふえず減らずで、戦争という状態がないかぎり、いつの場合も確固として存在をつづけている。そして、最近これを促進する一大要素が出現した。それは「経済大国日本」を象徴する外国旅行ブームである。一九七二年にアメリカで開かれた世界エスペラント大会への日本からの参加者は、主催国アメリカを除くと、第一位の数を示したのであった。七三年のベオグラードでの世界大会にも大挙参加している。

これらがいずれもエスペランティストであることに変わりはない。また、統一的言語運動という性格上、こうした人びとをことごとく何らかの形で包含できる運動形態が理想であることは言うまでもない。その使用目的にしたがって、それぞれが相応のセクションを形成するのもまた当然である。そして現実の運動は試行錯誤の中にも絶えずこの方向への模索をつづけている。

以上の事実の上に立って、本書でとりあげるのは、第二、第三の層に属する人たちであり、その運動の系譜であり、日本エスペラント運動史そのものとは若干のくいちがいがある。また、ここでは「反体制的」という意味を広く解釈して、時の国家権力に対して公然と対立の姿勢を示した人たちの

対象とし、その権力を否定して、どのような国家権力、あるいは非国家権力を指向していたかについては、しばらく問題外としたい。また隠然と、面従腹背的にでも権力への抵抗を示した人たちについては、資料などの関係で言及できなかった面も残っている。

堺利彦の先駆的文章

以上をマクラとして、次のものを読んでいただくことにする。日露戦争の切迫に際して、公然と反戦をとなえて創刊された幸徳秋水・堺利彦らの『平民新聞』が圧迫のために発行不能におちいり、民主主義的医師、加藤時次郎が出していた週刊『直言』がその後継紙になった。その紙上に堺利彦が、時の東大助教授であり、日本古文書学の創始者であり、一部の人びとに「クロエス」と言われた黒板勝美の談話をもとにして、エスペラントをこの国の社会主義運動と結びつけて論じた先駆的文章がこれである。前記のように、実はその前年、日本民主主義運動の先駆者吉野作造が、当時キリスト教の宣伝誌であり、のちにフェビアン協会の機関誌に発展する『新人』にエスペラントの紹介を書いていたのはあるが、その影響力において、堺利彦のものとは格段の差があった。

エスペラント語の話

世界の交通が日ましに頻繁になるにつれて、各国言語の相違よりくる不便と不愉快とがよいよい

切実に感ぜられてきた。外国語を知らぬ者の不自由、外国語を学ぶ者の苦痛、いずれにしてもほとんどたえがたき事実である。そこで世界中の人類がもしことごとく同一言語を用いるようになったらば、いかに便利で、いかに愉快であろうかとは、多くの人の心中のあこがれとなってきた。すなわち世界語（もしくは万国語）の思想が起って来た。

一六六八年、キルキンス（ウィルキンス）僧正というのがはじめてヨーロッパで万国通用語（Philosophical Language）のことを説いた。その後もいろいろこれに関する提案があったけれど一つも成功しなかった。しかるに一九世紀末になって、言語学研究進歩の結果として、一八七九年、ヨハン・マルチン・シュレイエル氏の世界語（Volapük）の発明となった。

シュレイエル氏の世界語ヴォラピュックは、すでに万国大会を開くまでに及んだが、そのあまりに変化が多すぎて実習に困難なので、ついに十分の発達をみる事ができなかった。

しかるに一八八九年に至り、スペインのエスペラント氏がこのヴォラピュックに改良を加え、一八九四年に至りポーランドワルソーのツァメノフ氏（Dr. L. Zamenhof）がさらにこれを大成して世に発表した。これより世界語エスペラント（Esperanto）（La Lingvo Internacia 世界語）が有名になった。それで学会本部をワルソーに置き、ツァメノフ氏が会長となり、欧米諸国に支部を置き、数種の新聞雑誌を発行し、また種々の翻訳をなしている。英国では昨年十月エスペラント協会を設け、久しくインドに滞在して広く諸国語を研究したポーレン中佐が会長となり、ロンドンで『エスペラントイスト』と題する専門雑誌を発行している。なにしろエスペラントの近年の発達は非常に勢いである。

世界語の第一要素は習いやすいにある。そこでエスペラントは主として欧州諸国語の語根（ルート）をなせるラテンにより、なるべく現在の語に近いのを取り、発音を明白にし、語尾変化を正確にしている。すでに今日でも学術上の名称には各国ともラテン語を用いているのだから、それを商業上や交際上用いられぬはずはないというのが、エスペラントの主張である。

さてエスペラントの組立を聞くに、アルファベットはラテンのを用い、その中で g と、y とを除き、あらたに五字を加えてある。その五字は、e、j、g 等に符号を付けたものである。語尾の変化は、名詞はみな o で終わり、形容詞はみな a で終わり、動詞の現在形は as、過去形は is、未来形は os、インフィニチブは i で終わるといふ風である。たとえば左のごとし。

I	Mi	To love.....Ami
My	Mia	I loveMi amas
		He will love.....Li amos

単語の例は Birdo（鳥）、Patro（父）、Homo（人）、Sano（健康）等のごとし。

エスペラントの語根はラテン語、露語、英語の中より集めたもの約一千にして、あたかも欧州諸国語を縮写したようなものといわれている。欧州人は約二か月にこれを学習しえるという。日本でこのエスペラントのことに注意している者は、東京大学の黒板勝美氏と長崎にいるフランスの宣教師某と外に二、三人しかないとのこと。

仏国の社会党がこのエスペラントを世界語と認め、その戦士に学習を奨励するの決議をしたという前号所載の事実になみ、吾人は黒板氏の談話によってこの記事を作ったが、日本においても、

かくのごとき世界的、万国的なる貴重事業が多くの人土によって研究せられんことを切望する。⁽⁵⁾

文中の「一八八九年に至り、スペインのエスペラント氏がこのヴォラピュックに改良を加え、一八九四年に至りポーランドワルソーのツァメノフ氏がさらにこれを大成して」とは黒板が誤解していたのか、堺が聞き損じたのか、今となっては不明であるが、言わずもがなの訂正を加えると――

ザメンホフが「エスペラント博士」のペンネームで、その国際語案を発表したのは一八八七年のこと、ヴォラピュックとは何の関係もない。ヴォラピュックとはシュライエルという人が考案した国際語で、その語いがきわめて勝手気ままに作られていたため、難解で有名であったが、しばらくして滅びてしまったもので、レーニンも『共産主義内部の左翼小児病』の中で、難解物の代名詞として使用しているくらいであった。ザメンホフの国際語案は、はじめのうち「エスペラント博士の国際語」と呼ばれていたのであるが、やがてそれが簡易化され「エスペラント」と呼ばれるようになり、ザメンホフ自身もこのペンネームの使用をやめてしまったのであった。もちろんザメンホフとスペインとは関係がない。「ツァメノフ」の由来も全然わからない。Zamenhof をドイツ語的になまったのであろうか。当時の黒板や堺のエスペラントについての認識はこの程度であったものと思っただけかえあるまい。また、文中の「gと、yとを除き」は「p、w、xととyとを除き」であり、「e、j、g等に符号」とあるのは「c、g、h、j、s、uに符号を付け」るの誤りである。

注

- 1 丘浅次郎『猿の群れから共和国まで』一九二〇年 共立社。最近著作集が出た。
- 2 長谷川辰之助『世界語』一九〇六年 彩雲閣。同『世界語読本』同年 同社。『二葉亭四迷全集』第九卷 一九六五年 岩波書店版に、前者は全文、後者は一部所収。
- 3 伊井辻老人(伊東三郎)『二葉亭とエスペラント』『二葉亭研究』『二葉亭四迷全集』第一〇巻(岩波書店、藤間常太郎「エスペランティストとしての二葉亭四迷」発行年代不明、『井上先生古稀記念新聞学論集』所載)。
- 4 宮本正男 Historio de la japana Esperanto-movado, 1969, L'Ombuso. ただしこの中の分類は本書と少しばかりちがっている。
- 5 『直言』一九〇五年三月十九日号。『堺利彦全集』第三巻所収 一九七〇年 法律文化社。『直言』全巻の復刻版もある。